

『能海周辺の人々』—太田保一郎「西藏」を中心に—

|        |                             |
|--------|-----------------------------|
| タイトル   | 『能海周辺の人々』—太田保一郎「西藏」を中心に—    |
| 著者名    | 高本康子                        |
| 雑誌名    | 能海寛研究会機関誌『石峰』               |
| 号      | 第16号                        |
| ページ    | 8-14                        |
| 発行年    | 2011.3.15                   |
| E-mail | Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会) |

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田(当時は東谷村)浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏経の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心経」西藏文直訳(梵・藏・漢・英)など四巻が著書として永遠に伝う。

# 能海周辺の人々—太田保一郎『西藏』を中心に—

能海寛研究会会員 高本康子

『能海寛遺稿』（能海寛追憶会編・発行、1917年）に、「西藏般若心経出版の縁由」という一文を寄せている太田保一郎という人物については、現在までの能海研究において取り上げられることが非常に少なかった。本稿の目的は、この人物と能海、そしてチベットとの関わりがどのようなものであったのかについて、現時点における情報の整理と、その分析を試みることにある。

## 1. 能海寛と太田保一郎

長くなるが、『能海寛遺稿』所載の太田「西藏般若心経出版の縁由」を以下、引用する。「往年余は二三の同志と竊かに西藏の研究に従ひしとき、仄かに能海寛君入蔵の企図を聞き、一面識はなけれども、其の壮挙を偉とし、其の成功を祈り、他日帰朝の上は必ず大に国家社会貢献せらるべしと、深く期待する所ありしに、図らざりき明治三十六年十二月君は西藏国境に於て横死せりと凶報新紙上に現はれぬ。余は之を聞きて暗然として有為の士を失ひしを痛歎したりき。其の後、張崎幸寿氏より君が著はすところの蔵文心経直訳の写本を得たれば、せめて之を世に公にし、江湖に頒布したらんには、聊か君が志の一端をなさんかと、心常に之を思ひ、亦人にも謀りしに、機縁未だ熟せず空しく数年を経過せしが、其の後、高楠博士を訪ひて事由を告げたるに、博士は大に余の意を諒し余を南條博士に紹介せられ、又本経の校正を寺本婉雅君に囑せられたり」（『能海寛遺稿』1-2頁）

つまり太田は、能海と面識はなかったが、張崎幸寿という人物から能海のチベット文般若心経の原稿を渡されており、その出版を望んでいた。その後高楠順次郎を経由して南條文雄に紹介され、この原稿が寺本婉雅の校正で『能海寛遺稿』に収められることになった、ということである。南條による『能海寛遺稿』所収「能海寛君略伝」によれば、太田がこの出版を考えたのは、1910（明治43）年11月であったという（頁番号なし）。

この張崎幸寿という人物について、詳細はまだわかっていない。しかし張崎自身の記述である「西藏文大経典嘆仏偈訳」（『無尽燈』第10巻第2号、1905年2月1日発行）において、能海と同様に、入蔵を目指していた本願寺派の川上貞信を、「恩師」と呼んでいる（61頁）。川上はスリランカとインドに留学し、1893（明治26）年にボンベイで客死した東温謙の遺志を引き継ぐ形でダーズリンで入蔵準備をしていたが、1897（明治30）年、断念して帰国した。そののち、文学寮教授を経て、1899（明治32）年には大陸へ渡った。1900（明治33）年の義和団事件の際には北京に居合わせており、日本軍の北京籠城において柴五郎の指揮下で戦闘を経験している。その後1903（明治36）年頃から1年ほど、真宗大学（現在の大谷大学）でチベット語を教えていた。上掲の張崎の記述は、この真宗大学の雑誌『無尽燈』に投稿されたものである。この張崎論文がまさしくチベット仏典の和訳であり、その中で川上を「恩師」と呼んでいることを考え合わせると、張崎が川上の真宗大学時代のチベット語の弟子であった可能性がある。そうであれば能海の前稿は、川上から張崎に渡され、そして太田の手元へ届いたものと考えられるのである。

## 2. 太田保一郎履歴

太田保一郎の履歴について、現在のところ最も詳細な記述と言えるのは、小城町史編集

委員会編『小城町史』（小城町、1974年）である<sup>1</sup>。同書によれば、太田は、1860（万延元）年1月1日に、士族太田源吾の長男として生まれたという。太田自身の回想によれば、祖父も父も槍術や剣術に秀でた人物で、「人に教える身分」であったという。しかし太田自身は幼少期から「蒲柳の質」であり、そのため家庭では武術ではなく、学問に重きをおいた教育を受けた（以上、「病窓漫録」（1）『小城の歴史』第21号、1976年10月25日発行、1頁）。

更に『小城町史』には、太田は学習院の教授をつとめたとある。『学習院百年史』（第1編、学習院、1980年）によれば、1891（明治24）年八月の時点で、助教授20人のうちに太田の名前が見える。学習院の記録を見ると、1904（明治37）年には、中等科国文・漢文担当の教授であった（「学習院一覽 自明治三十五年九月至明治三十六年八月」学習院発行、1904年）。

太田には、妻篤子（とくこ）を追悼して書かれた『思出の記』（出版者不明、1922年）があるが、同書には、この学習院時代についての記述も少量ながら見られる。中には、乃木希典夫妻が明治天皇に殉じた際の衝撃を語った記述もあり（同書、4頁）、当時の太田家における交際のありようを、その一端ではあるがうかがうことができる。また、同書によると、1888（明治21）年から1905（明治38）年までは、麴町区紀尾井町の太田家で、「幼少子弟」を預かって世話をするなどということもしていたようで、その人数は3,40名にものぼったという（同書、9頁）。

上掲『小城町史』によれば、1924（大正13）年、病気のため小城に戻り、同町一の坪に住んだという<sup>2</sup>。同町に戻ってからは、郷土史研究に尽力し、小城鍋島家内庫所の小城藩政時代の記録類を調査・研究した。また地元の郷土史関係の雑誌『佐賀郷友』、『肥前史談』などで執筆し、特に『佐賀郷友』では顧問をつとめつつ、「桜陰」の号で歴史随筆を連載し好評を博したという。

この間、『小城郡誌』（1934年）、『佐賀県郷土教育資料集』（1935年でも執筆を担当し、1941（昭和16）年には、中島吉郎著『佐賀先哲叢話』の国訳を行なったという。また、1936（昭和11）年には初代小城郡長持永秀貫の遺稿『小城郡誌』を刊行するなど、活発に活動した。昭和初年に「小城史談会」が創設されると、その会長となった。1951（昭和26年）3月17日、92歳で逝去するまで、地元小城町の郷土史研究に尽力した（以上『小城町史』、752頁）。

### 3. 太田保一郎とチベット

#### 3.1. チベットに対する興味

では太田はなぜ、能海の原稿に興味を持ったのだろうか。そもそも太田とチベットとのかわりほどのようなものであったのか。

上述のように、学習院での太田は、国文・漢文を中心に担当していたと思われる。しかし彼の興味の対象が、それらに限られるものではなかったことは、彼の著作が様々な分野

<sup>1</sup> 太田の履歴について記述するものとして、その他には、小城郷土史研究会編『小城の歴史』（代表岩松要輔、編集田久保佳寛、太田正和）所収「太田保一郎先生のこと」がある（『小城の歴史』第1号、1968年、1頁）。同誌編集担当の田久保佳寛氏には、資料をお送りいただいただけでなく、貴重なお教示を賜った。記して感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 例えば1941（昭和16）年の『佐賀先哲叢話』の奥付には、太田の住所として小城郡小城町字畑田692番地という記載がある。

にわたっていることから明らかである。以下に示すのは、国立国会図書館所蔵分の彼の著作である。

- 『新撰物理学』星野彦三郎、那須理太郎、連壁書楼、1882年
- 『普通学校管理法』林斧介等、1882年
- 『德育原論』金港堂、1891年
- 『教育勅語述義』金港堂、1892年
- 『教育勅語略解』金港堂、1892年
- 『中等新地理』八尾書店、1894年
- 『中等新地理摘要』八尾書店、1897年
- 『史記鈔』下巻、八尾書店、1898年
- 『珠算教本』巻之三、山田忠他、奎文館、1898年
- 『新撰教育学』松栄堂、1898年
- 『実験中学算術練習書』八尾新助、1898年
- 『地理学新教科書』(加藤庄三郎、富山房、1899年)
- 『西藏』西藏研究会、嵩山房、1904年
- 『普通地理学講義』(加藤秀一共著、明治講学会)
- 『佐賀先哲叢話』中島吉郎著、太田保一郎訳、佐賀郷友社、1941年
- 『教育勅語関係資料』第9集、日本大学精神文化研究所、1981年

彼の関心の広がりを示す記述は、太田自身の回想の中にも見られる。「私には鳥居龍蔵先生や河口慧海先生のような頑強な身体があったならば、或は支那雲南方面の苗族や、満蒙方面に肅慎、金元の遺蹟を探り、西藏青海方面に唐兀羌などの古今を調べん為に出掛けて居たかもしれない」(太田保一郎「中央サンの話」(1)『小城の歴史』第25号、1980年、1頁、原出典は『佐賀郷友』1935年7月)。チベットに対する興味は、この引用中に見るように、大陸を広く対象とする、「遺蹟を探り」、「古今を調べん」とする歴史学的興味に含まれていたと言えるだろう。

太田のチベットに対する関心を具体的に示すものが、1904(明治37)年出版の太田保一郎緒言・校補、西藏研究会纂述『西藏』(嵩山房、1904年9月発行)である。チベット関係の太田の著作としては、これが唯一のものである。

### 3.2. 西藏研究会

この『西藏』は、「西藏研究会」纂述となっている。この「西藏研究会」とは、どのようなものであるのか。これについては、『能海寛遺稿』の太田「西藏般若心経出版の縁由」の中に、「往年余は二三の同志と竊かに西藏の研究に従ひしとき」(上掲『能海寛遺稿』1頁)という記述があるのに注目される。これが「西藏研究会」ではないかと推測されるからである。

太田に能海の般若心経原稿を渡した張崎幸寿という人物との接点は、この会であったのではないかと考えられる。『西藏』の太田「緒言」には、「我が西藏研究会員某氏、此の書を編み以て西藏研究の一助に資せり」、つまり、『西藏』が、この「西藏研究会」会員のあつた人物によって事実上執筆された、とある(2頁)。張崎は、既述したように、真宗大学の雑誌にチベット仏典の和訳を投稿しており、少なくともこの投稿(1905年)前後には、チベットに関心を持っていたといつて差し支えないと思われる。川上貞信を「恩師」と呼んだことには、チベットへの関心の強さがうかがわれるように考えられる。以上のことから、

未だ推測の域を出ないものではあるが、太田が言うところの、『西藏』を執筆した「某氏」とは、張崎を指すのではないかと思われる。

#### 4. 『西藏』（西藏研究会編輯（纂述）、太田保一郎校補、高山房、1904年9月発行）

上述の「西藏研究会」の活動成果が、この『西藏』であると思われる。同会の出版物としては、現在の所これが唯一のものである。以下、この著作の内容を検討したい。

##### 4.1. 同書概要

同書出版の目的は、チベットについての正確な概説を世に供給することであったと思われる。『西藏』「凡例」には、「本書は簡短正確に西藏の事情を社会に紹介せんが為に纂述したるもの」（頁番号なし）とあるからである。想定されている読者は、「世の中等教育に従事せる諸君、及び其の学生諸子」とされている（「凡例」、頁番号なし）。したがって、初等教育を終えた人々を対象とした教育に使用される参考書の一つとして編まれたことは明らかである。

『西藏』出版当時は、太田が学習院で教鞭を執っていた時期に属する。太田の著作には、地理学教育に関係するものが2点あり、いずれも『西藏』前後の時期に属するものと思われる（『地理学新教科書』加藤庄三郎、富山房、1899年、『普通地理学講義』加藤秀一共著、明治講学会、刊年不明）。従って、この時期の太田が、地理学・地理教育に関する何らかの活動をしていて、その延長上にこの『西藏』があったのではないかと推測される。

同書執筆にあたって参照された参考書として、「凡例」では、以下の3種が挙げられている。すなわち、①「トラウエル、エンド、アドヴェンチュワ、イン、チベット中の前半」、②「ロックヒル氏の著書」、③「西藏図考」である（頁番号なし）。

このうち①は、William Carey, *Travel and Adventure in Tibet* (London, Hodder and Stoughton, 1902)、②は、William Woodville Rockhill, *The Land of Lamas: Notes of a Journey through Chaina, Mongolia and Tibet* (London, Longmans, 1891)、③は、清の黄沛翹撰「西藏図考」（例言は光緒12（1886、明治19）年）と考えられる。

この3冊の中で、主に引用されているのは①である。著者ウィリアム・ケアリー (William Carey, 1861-1935) については、詳細はわかっていない。しかし、*A Garo Jungle Book* (1919年) など、インドのキリスト教活動関連の著書がいくつかある<sup>3</sup>ことから、やはりインド、特にベンガルとアッサムで活動したプロテスタントの宣教師ではないかと思われる。同書によれば、1899年7月、ケアリーは一月ほどシッキムに滞在し、この時、他二人と同行してゼレップ峠を越え、チベット側に入った (*Travel and Adventure in Tibet*, p.165)。この時、ヤトゥンで、チベット旅行で名高い英国人女性アニー・テイラーを訪問している。

アニー・テイラー (Annie Taylor, 1855-没年不明)<sup>4</sup>は、キリスト教プロテスタントの宣

<sup>3</sup> 本稿本文既掲の *A Garo Jungle Book* の他には、例えば *The Cristian Forces in Bengal, Calcutta, Cristian Council of Bengal and Assam* (出版年不明、1926年か) がある。

<sup>4</sup> アニー・テイラーはイングランドの富裕な家の娘として生まれた人物で、父は王立地理学協会の会員であった。彼女自身は思春期に宣教師となることを決意し、そのため、ロンドンでは医学も学んでいる。1884年、プロテスタントのメソジスト派による中国内陸伝道団の宣教師としてイギリスを出発し、中国江蘇省の鎮江で伝道活動を開始した。その後、1885年には安慶（安徽省）、1886年には蘭州（甘肅省）で活動していたが、肺結核のため上海に戻り、オーストラリアで療養した。健康を回復したのち、実妹スゼット・テイラーが住んでいたダーズリンに向かい、1889年、到着した。更にシッキムへ移動し、チベット語の学習を進めつつ、医療活動を行った。この時、チベット人男性一人の改宗に成功し、以後こ

教師として、中国で活動した人物である。1891-93年にはチベットでの布教活動のため、中国側から2度入蔵した。いずれも、ラサ経由でインドへ抜けようとしたものであったが、ラサまでは到達できず、ナクチュでチベット当局に阻止され、引き返さざるをえなかった。その後、インド側のヤトウンに移り、1909年までここで入蔵の機会をうかがっていた。ケアリーがテイラーを訪問したのは、このヤトウン時代である。

ケアリーはこの旅行をするにあたって、チベットやネパール、シッキム、ブータンなどについての情報不足を痛切に感じたという (*Travel and Adventure in Tibet*, p.3)。彼は、「チベット全体を正確に概説する読みやすい書」の必要性を、この著作を出版するに至った目的として掲げているが、この旅行の経験によるものであると思われる。そして執筆時、彼が何より重要な情報源としたのが、アニー・テイラーの日記であった。

ケアリーは1899年にテイラーを訪問した際、テイラーから日記を見せられたが、私的な記録であるという遠慮から、それに目を通すことはせず帰った (*Travel and Adventure in Tibet*, p.167)。しかしその後、テイラーとは通信の往復があり、ケアリーがチベットについての著作を書こうとした際、テイラーはこの日記をケアリーに送ったのである (同上)。

この *Travel and Adventure in Tibet* が掲げた、読みやすく正確なチベットに関する概説の提供、という出版目的は、『西蔵』と同軌のものである。従って、『西蔵』編者がこの著を主に参照して記述したのは、自然な結果であったとも言えよう。『西蔵』の内容は、この書の記述を翻訳したものに、前掲2種の参考書の内容が適宜挿入され、更に編者・校補者による情報の付加が施されたものとなっている。

内容そのものは、以下のような構成となっている。第一章「不可思議国」は、まえがきともいべき部分で、チベットについての簡単な紹介がされており、近藤重蔵の「喇嘛考」や、インドのサラットチャンドラ・ダースにも言及がある。第二章「関に攀じ上ること」は、主にヒマラヤ山脈についての記述である。第三章「チヤン地方及び其の破稜」は、チベットの大部分を占める高原部についての記述で、その範囲と、当時までに行われていた探検調査について述べられ、マーカム (N. Malcolm)、ウェルビー (M. S. Wellby)、リトウルディール (G. R. Littledale)、バウアー (H. Bower)、前述のアニー・テイラーなどの体験が紹介されている。第四章「西部西蔵」は、ラダック地方の地誌を紹介するものである。第五章「国の中心」は、ヤルツァンポ川流域に関するもので、イギリスによる同地域調査の経緯にも触れている。第六章「拉薩府」は、題名の通りラサについて述べるもので、欧米人によるラサ到達の試みの経緯についても詳述しており、同書中最も紙数が割かれている章の一つである。第七章「西蔵鎖国の理由」は、中国当局の動きを中心に標題について述べたものである。最初に、欧米人の入蔵探検家の遭難について、ド・ランス (J. L. Dutreuil de Rhins) などを例に挙げて説明し、末尾は、チベットの鎖国の原因がイギリスのシッキム「占領」にあることを指摘して締めくくられている (53頁)。第八章「商業輸出入品」は、ラサが貿易の中心地となっていることを指摘し、その主要品目である茶、絹織

の男性は彼女の従僕となった。1891年、上海経由で中国側ルートからの入蔵を試みる。しかしナクチュでチベット当局に阻止され、ダーチェンルーに戻る。翌年再び入蔵を試みるが、やはりナクチュで身柄を押さえられ、1893年ジェクンドへ戻り、イギリスへ帰国した。イギリスでは開拓伝道団を自ら結成し、1894年、それを率いて出発、ダーズリンに到着後、更にガントクへ移動した。しかし伝道団は分裂し、アニー一人がガントクに残ることとなった。アニーはここで布教活動を続けたが、1895年、更にヤトウンに移動し、布や菓子、装身具を扱う店を出した。その後詳細は不明であるが、少なくとも1909年までのある時期に健康を害し、イギリスへ帰国したという (以上、D.ミドルトン『世界を旅した女性たち』佐藤知津子訳、八坂書房、2002年、265-310頁)。

物と、交通路について述べたものである。

第九章「喇嘛教の起源及び発達」は、チベット仏教史を概説したもので、これも同書において、紙数が特に多く割かれている章の一つである。第十章「西藏神学」は、前章に続いてチベット仏教について述べるもので、この章では、教義の内容に重点を置いて説明されている。ここではウォデル (L. A. Waddell) 等の説に言及がある。第十一章「僧侶及び僧院」も標題通り、チベット仏教の寺院と僧侶について述べたもので、僧侶の服装、使用される道具、寺院の立地や建築様式、設備、著名な寺院、年中行事、修行過程などを紹介している。言及される寺院には、デブン、セラ、タシルンポ、サキヤ、サムディン、クンブム、雍和宮、五台山などがある。

第十二章「西藏の人情風俗」は、チベット人の風俗や生活習慣を紹介したものである。例えば、住居の建築様式や、室内の設備について述べた部分には、家の守護神について詳しい言及がある。また、一妻多夫などの家族制度、結婚式や葬儀、子供が生まれた際の行事、医療、教育や迷信、仏教に対する人々の信仰のありようなどが説明されている。そのほか、服装や装飾品についても、挿絵を挿入して詳述している。これも、紙数が多く割かれている章の一つである。第十三章「言語文字」は、チベット語とチベット文字について述べる部分で、ロックヒル (W. W. Rockhill)、ホジソン (B. H. Hodgson) の説を引用しつつ、実際にチベット文字を挿絵として挿入して説明している。第十四章「政治」は、中国との関係と、チベットの行政について略述したものである。第十五章「人種 史略」は、チベット人の外見的特徴と、民族としての淵源、現在までの歴史について、漢文資料などを参照しつつ述べたものである。第十六章「軌近の旅行者」は、欧米人、日本人の入蔵者について述べた部分で、ヘディン (S. Hedin) とテイラーについては特に詳細である。

巻末に「附録」として、「青海地方風俗及び喇嘛」があり、これは、テイラーの日記をクンブム寺に関する部分を中心に収録したものである。これも、同書において紙数が特に多く割かれている章の一つとなっている。

『西藏』の内容は以上のようなものであるが、前述したように、その大部分は a. のケアリー著書を翻訳したものである。ケアリーの原書にあったイラストなども、ほとんどそのまま使われている。例えば、ケアリーの原書に、*The Dalai Lama on His Throne. By a Chinese Artist* (p.53) とある挿絵は、『西藏』に、「第八図 王座に於ける達頼喇嘛の図」(40 頁) として掲載されている。しかし記述には適宜、他資料の引用や、「纂述者」つまり筆者の見解などが付け足されている<sup>5</sup>。また、太田保一郎は「校補」とされているが、彼の「校補」というのは、全体を見た上で、必要な情報を補ったということだと思われる<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> この例としては、『西藏』94 頁に、「北京の僧院を雍和宮と云ふ、寺格甚だ高し、僧侶一千を住せしむ、悉く蒙古人なり、主要なる伝道には仏の木像あり、高さ七十呎、足指二十一吋あり、両手に大なる蓮花を持ち、其の胸部には宝石類を装へり、行廓は其の周囲を繞り、青銅の二個の大獅子は、其の両側に立てり、此の建物は、絹の幕及び西藏産の絨繡を以て、華麗に裝飾せり」に続けて、原書にはない「往年我が国に来朝せし阿嘉胡土克図は此の雍和宮の高僧なり」という一文が付け加えられている。

<sup>6</sup> 太田の「校補」部分と考えられるものには 5 箇所ある (『西藏』90、106、130、132、143-4 頁)。一例としては、『西藏』90 頁に、「喇嘛族中、最も権力強大にして、僧侶多きものを拉薩府の西方三哩なる別蚌寺 (Depung 米の堆積の意) なりとす、黄金にて葺ける殿堂の周囲に群集せる七千人の僧侶あり、大喇嘛の遺骸は、其の附近の塔中に葬れりと云ふ」に続けて、本文とは別に行を下げて「校補者云ふ、拉薩附近の大寺は、府の東南八十清里に甘丹寺、西北十六里に布雷峯廟、北八清里に黄金寺、南に桑鳶寺あり、西十五清里に別蚌寺ありて、別蚌最も盛大なるが如し、又其の里程も三哩と云へるに合へば、「デブン」寺を以て仮に別蚌寺に宛てたり、而して別蚌、色拉、甘丹、桑鳶を蔵の四大寺と称す」という部分が挿入されている。

#### 4.2.同書における注目点

注目すべき点は、以下の2点である。

##### ①テラーの引用

『西藏』が主に引用しているケアリーの著書 *Travel and Adventure in Tibet* には、アニー・テイラーの、1892-93年のチベット旅行中の日記が収められている (pp.173-285)。この日記については、その要旨は出版されていたが (*Travel and Adventure in Tibet*, p.165)、日記原文を収めたものとしては、このケアリーの著書が最初のものであった。前述したように、ケアリーはこの日記の原本をテイラーから預かっていた。厳しい旅の間、テイラーが身につけて持ち歩いてきたため、日記帳は痛んでおり、また、筆跡も非常に読みにくいものであった。この日記を解読した際の苦心については、*Travel and Adventure in Tibet* に詳述されている (pp.165-169)。

彼女のチベット情報は、英国で非常な注目を集めた。ナクチュまでのチベット入りに成功した彼女に対して、雑誌や新聞のインタビューが頻繁に行われ、また、アニーは講演で多忙な日々を送った (D.ミドルトン『世界を旅した女性たち』佐藤知津子訳、八坂書房、2002年、302-303頁)。日本においても彼女の活動には、例えば河口慧海の『西藏旅行記』のように、言及はされている (『西藏旅行記』下巻、博文館、1904年、56頁)。但し、旅行記の日本語訳は、まとまった形式では行われていない。『西藏』のテイラー日記収録部分は、彼女の旅行記の日本語訳として最初のものであると思われる。

##### ②河口とのかかわり

『西藏』の出版は1904(明治37)年9月であるが、太田「緒言」は、同年三月付である。この緒言に、「我が西藏研究会員某氏、此の書を編み以て西藏研究の一助に資せり、是れ実に西藏に関する著書の嚆矢なりと謂ふべし」(2頁)とある。河口『西藏旅行記』の出版は同年3-5月であり、緒言が書かれたのとほぼ同時期であることに注目される。

この『西藏』を「実に西藏に関する著書の嚆矢なりと謂ふべし」とする記述には、以下2種の可能性が考えられる。一つは、河口の『西藏旅行記』より本当に早い段階で準備されており、河口旅行記によってチベットへの注目度が高まったことを機とした出版であった可能性である。第二は、河口旅行記を「西藏に関する著書」の一つとは認めていなかった可能性である。河口のチベット旅行談に対して、当時の東京地学協会などが非常に消極的な反応を示したこと(1)を考えると、この可能性も否定できないものと思われる。いずれにしても、この『西藏』は、河口のチベット旅行談が当時の日本にもっていた存在感のありようをうかがい得る資料の一つであると言える。

#### 5.おわりに

チベットをめぐる太田の活動については、まだ不明な部分も多いが、彼が「校補」した『西藏』は、例えば、山縣初男『西藏通覽』(丸善、1907年)において、「本書の引用若くは参考とせる書籍の主なるもの」として挙げられたものの一つとなっている。この『西藏通覽』は、その出版の目的を、「西藏国なるものゝ全般に渡れる概略を社会に紹介せんことを目的とせり」(「凡例」、1頁)としているので、『西藏』と軌を同じくするものであり、その意味でも参考書とされるのは自然であったと思われる。「主なるもの」の中に選ばれたことには、当時における『西藏』の存在感の一端をうかがい得ると思われる。